

## 俳句の中の夢 (5)

池田亮二

馬に寝て残夢月遠し茶の烟(けぶり)

芭蕉

こんな夢の見方もあるんですね。夜明け前のかすかな月明りだけの山道を馬に乗った翁、鞭を垂れてうつらうつら夢を見て杜牧（唐の詩人）と楽しく詩の話をしている途中ではっと目が覚めてしまい、気がついたらいつの間にか里にいていた。残夢というからまだまだ話したいこともあったろうに、残念な夢の幕切れだったことでしょう。しかし、それよりも、よくも馬から落ちなかったとほっとします。芭蕉には酒に酔って馬から落ちたという句もありますが、今回は落ちなかったけれど、それにしても暗い夜道を馬まかせで眠りこんで夢の中に遊ぶとは、なんとも気楽で風流な景色です。よほどお利口な馬だったか、芭蕉は夢見の達人のようです。

手まぐらの夢はかざしの桜哉

蕪村

「かざし」は髪に飾る枝花、造花のこと。蕪村さん肘枕で寝ながら夢の中で花見をしているようですが、実は桜のかざしをさした美人の姿に見とれて鼻の下を長くしているのだ。と勘ぐるようなやつは、俳句を論ずる資格などない、と叱られるか。

高井也有の『うずら衣』に、夢の中では蝶となって漆園で戯れたり、蟻の国（槐安国）の王様になることもできる（『南柯の夢』）。金も使わずに美女と戯れ、見知らぬ神様が枕上に立って幸せを運んでくださる。それをなんで仏様は無常だの、幻だのと言うのかと言ひ、「夢現のおなじものならば、夢を現にかぞへ入れて、起きてたのしみ寝てたのしまば、五十年の年月をわたるも百年の算用にあふべきや…」とあります。夢も現実も同じものと考えれば、人生五十年が倍になる、というわけです。

頭を剃られながら見る夢、足袋をはいて見る夢、足を出して寝て見る夢、白昼に見る夢、宝船の絵を枕に見る夢、馬に乗って見る夢など、夢の見方もさまざまです。あなたもどうすればいい夢が見られるか、工夫してみられてはいかがでしょう。

短夜やわれにはながきゆめ覚ぬ 也有

ところで、近現代の俳人はどのように夢の句を詠んでいるのでしょうか。代表的な俳人の中から数句探してみました。

短夜の鶏鳴いて夢悪し 子規

すぐ来いという子規の夢明易き 虚子

短夜や夢も現も同じこと 虚子

上官を殴打する夢四月馬鹿 沢木欣一

よく眠る夢の枯野が青むまで 兜太

見えてくるのは、也有は「夢現の同じものならば」と仮定形でいい、虚子は「夢も現も同じこと」と断定しています。也有の夢は蟻の国や涅槃の境という異次元の世界を現実と重ね合わせて「同じものなら」としているのに対し、虚子の夢は単に現実と地続きの「同じもの」としているようです。だから、夢の中で子規に呼び出されたり、憎い上役を夢の中でぶん殴ったりするばかりです。

どうやら夢の世界でも現代は現実的で想像力の広がりを失っているように感じます。

それぞれの句の解釈は私の独断です。間違えたり、見当違いがあれば、それもと  
ご 愛 嬌 と お 許 し を 。  
了